# 動物はフレンド、フードではない

小学四年生の大竹美仁さんが書いた作品「だれのためのきょう界線」を読んで「ああ、日本にもわたしの仲間がいるんだ」と思って、とてもうれしくなりました。

かれこれ三十年あまり前から、わたしはニューヨーク州の森のなかで暮らしています。森には、野生の鹿や黒熊や七面鳥やふくろうや、りす、しまりす、きつね、ねずみ、野うさぎ、やまあらし、ウッドチャックなどなど、そして、亀、蛇、蛙、いもりなどを含めると、本当に数え切れないほどの種類の生き物たちが住んでいます。

当然のことながら、いつのころからか「動物たちはみんな、わたしの友だち」と思えるようになってきました。

季節の移り変わりは、カレンダーではなくて、森の生き物たちが教えてくれます。樹木に小鳥たちが巣を掛け始めると、ああ、春が来たな、池で牛蛙が鳴き出すと、ああ、夏が来たな、と思います。

そういえば、今年の七月、一頭の黒熊がうちの網戸を破って、家のなかに入ってきました。

森には、黒熊のための食べ物は豊富にあります。だから、食べ物がほしくて入ってきたのではなくて、持ち前の好奇心からのようでした。「この家のなかには何があって、どんな生物が暮らしているのだろう」と、思ったのでしょうね。

そのとき、わたしはたまたま二階で仕事をしていたのですが、一階のキッチンで夫が昼ごはんを作っていたので、黒熊さんと夫は、顔を合わせてしまったわけです。

「ゴーホーム！（おうちへ帰りなさい）」

と、夫が声をかけると、黒熊さんは回れ右をして、すたこらさっさと去っていきました。自分で破った網戸の穴から、出ていったそうです。

夫の撮影した写真を見ながら、黒熊さんに名前を付けました。男の子のようだったので、レジナルドという名前にしました。

レジナルドくんはその後も一、二度、庭にやってきたので、わたしも挨拶をしました。おとなしくて、恥ずかしがり屋さんで、とっても可愛い子です。

というような話を、日本の友人、知人、仕事仲間などに話すと、みんな異口同音にこう言うではありませんか。

「小手鞠さん、日本だったらその子は即、駆除されますよ」

この場合の駆除とはすなわち、銃殺を意味しているようです。

わたしはびっくりしました。へええ、そうなのか、日本では銃殺されるのか、と。

もちろん、この森の熊と日本の熊では、性格も種類も異なっているのでしょう。日本の熊は人間に危害を加えることもあるのかもしれません。それでも銃殺か……と、胸が痛みました。

なぜなら、熊が人里に出てくるようになったのは、もともと暮らしていた環境が人間によって壊されたせいではないのか、と思うからです。たとえば、麻酔銃で眠らせておいてから、山奥に返すことはできないのでしょうか。

大竹さんも、感想文のなかで、知床のヒグマは世界遺産のエリア内では保護されているが、そのエリアから出てしまったヒグマは「駆除される」と書いています。

要するに、人は自分の都合だけで、ある生物を大事にし、ある生物を殺しているわけです。こんなことが許されていいはずはありません。

大竹さんは、感想文の最後にこう書いています。

「今の地球上で人間が一番力を持っていると思います。もしかしたらおそろしい生き物かもしれないので、ぼく自身が生物多様性の一部だと思いながら、自然や食べ物を、そしてどんな生き物の命も大切にしようと思いました」――。

大竹さんがわたしの仲間だと思ったのは、こういう理由からです。

動物はフレンド、フードではない。

この言葉は、アメリカでヴィーガン促進運動を進めている友人が教えてくれました。

ヴィーガンとは、動物愛護思想に基づいて、動物を使った、ありとあらゆる製品を食べない主義のことです。牛肉、豚肉、鶏肉だけではなく、ハム、ベーコン、卵、牛乳、バター、チーズなども食べません。また、食べ物だけではなく、衣類や日用品にも可能な限り、動物由来の製品や素材を使わない、という徹底ぶりです。アメリカでは若者を中心にして、この思想が広がってきているようです。

わたしはヴィーガンには及びませんが、三十代のころから、ベジタリアンであろうと努力しています（魚は食べています）。牛、豚、鶏は食べません。

おかげで、とっても健康です。

動物はみんな友だち。

そう思うだけで笑顔になれて、幸せな気持ちになれます。

大竹さんの作品は、わたしを幸せにしてくれました。それは、大竹さんの考え方と文章に、動物への敬意があふれていたからです。

よって、最優秀賞を贈りたいと思いました。

（２０２６年１０月　小手鞠るい）